

留魂錄

卷八十一
八七

杉本

留魂錄

廿二日

身、たどひ我宿の所也に
乃ち留靈し大和魂

十月念立日

王回道士

一金斗(こま)以錢百枚奉^シ社
趙貴高、希^シ楚庄王^ヲ仰く諸君^之和
ル所^ノ此^ニ子雲^是期^ト句^シ並過多士^{一葉}
納^シ楚深憂^シ不^可平^ト云^モ山車^也後生^三月
十^百闇^來行^フ聞^シ之^ニ之^ニ誠^ニ矣
又^シう時^ニ子雲^九字^ヲ贈^シ余是^ノ用^ヒ
一白綿布^ヲ取^テ虛^ニ至^シ誠^ニ不^動者^也

有セリ一句ヲ备ケヤハ越後守ニシテ
是ヲ詳説可也。西ノ里ニミ告志ヲ表スル
為年來ノ事多矣。元朝幕府ノ官体未
相孚不備アリ。天苟モ吾旨區々ノ個誠ヲ陳レ
給ハ幕吏必吾說ヲ是トセントモナキ。幸レ
此無良山。諭終ニ草ヲナス。不妙。今日至
心亦吾德。乖薄ナルニシト。今樹誰ガハ
ノ且怨シヤ。

一七月乃ノ柳テ詳説所出アリ。三奉行出度
蓮糊件而傍リ。一曰梅田源助。長守
向。弟重會。之を由何ノ密談。不セヒヤ。言

御内裏。毫アリ。火ヲ跡ガニ似タリ。遂爲
耳外申之者アリ。覺アリヤ。三條。ミ夫
梅田。ヨリ奸骨。こ。金典ニ志。譜ナ
ラ。欲セハ可ナリ。何ノ密談。ヲナサン。吾性
光明冥冥。ナル。御室。吾文。ヒトノ豫謀
ノ事ヲナサニ。金典。永。年。間。圖。ナノ
苦心。不。可。諒。陳。レ。然。天原公。函下。諸。ニ
籍。狂侯。ラ。要。ル。也。ノ。事。自。首。ス。鰐江
族。対。國。テ。終。ニ。下。獄。ト。ハ。シリ

一吾性。濟。於。萬。難。時。勢。逆。人。情。逼。アリ
キ。大。辱。之。所。テ。幕。府。建。物。也。ノ。湯。丸。ヲ
陳。シ。然。後。當。今。凶。事。疏。置。及。フ。其。謀。當。ニ

講究志行眞封案載充ク如是アシタ見
ト雖甚篤至フソ誠直旨ソアハ陳白无所
患ノ所當思レバ且軍戰ノ身ニテ國家
大事ヲ謀スレバ不面ナリ余深ク抗
セズ是ヲシテ罪ヲ獲ルハ勇々辞セアル所
ナリト云テセミス事有三天加教國ニ臺レ
テラ許共ナ是更非吾也敵ラ矣幸セサル明確
早御三次ハ將史、日當今政治ノ弊
テ歎設ニテ如是ニテハ往先三年無
事モ保シ難ヨリ將史激鬱シシカ曰
一是ラシ元諒ラ得ルト雖ニ悔サルナリト是

吾久キナリ子連ノ死ヌテ吾ニ竟
モ亦以意レベシ唐、改宗天那聯ニ五チ被
カラノ誠頼朱滅也、彼ヲ如ク激鬱シ
則英雄自ラ時措ノ宜キアリ要内者五秋
ニアリ折水今知リ幾ラ見ニヨ、寧ニ吾ノ
傳失當ラシ蓋棺後遺傳ヲ讀スナミ
一時リニ書甚第ナリ七月九日一通中五
後九月五日十月五日兩度ノ字出モテシル
爾間モナシノ十月十六日至リ口書誠頼
アリテ直意利セヨトノ事ナリ余九月
ニ聖使泥接航海確書等、諭一ミ合載
コス唯致ク所開港主ヲ程克申矣、因

力充実ノ後御ガ拂可然ナト吾心ニモ拂ケ
近裔ノ論ノ旨付テ口書トス吾言ヲ益キ
ア知ル故ニ敵テ云ハズ不滿ノ甚シキの病、
出航海一条ノロ召ニビスルシテ渾シ甚
ヨリヘシ

一七月九日一通リ大東公ノ重輪江原鷦鷯
申奉リ初臺ノ是等ノ車輦三毛乙謀知
至乙、明白ニ申キル才却ニ宣ヒキリト己ニ
逐ニヨリ聞キシニ幕ミテ一圓松丸ヒゲリ
因テ臺ミリ幕ミテ知ラヌ所ヲ強テ申亭
多ノ數ニ株連高近セハ善願ヲ傷フ
少ナカラズモラハテ猶リ承允ニ荷レト是

北ノ諫之改摩ノ事モ要諫ト、魯メリ又
高師得采諸友ノ姓名運利諸子ノ姓也モ奇
成丈、隱真白七、是吾後起ノ名也元
画ニ導キナリ。ソノ裏試事ノ吾ノノ哥志
一人モ他通及ナキ、实ニ大慶ヨラヘン。前
ノ諫を深ク考思セコ

一要諫一傍音事不處時、錯候ト利運之死
警衛者要嚴スルハヤホキトノ事實ニ
吾カ云ナリ。ヨリ終ニ奉行學ヲ召轉
詔賜セシント候ス。詔服善肖ラ度ニテ是
以テ十六日召到、席ニ臨テ石谷番、而
至行ト大シ。寧辨ス吾冒テ一死ヲ惜シテ

西寧の權誅シテサガリは先づ
吾十月五日西慶シテキ吟味イムヒ吟味イムヒノ具
申立シテタス要諱ヨウヒハ空モ利運リユンカ持カサガ
策アルニ非アリ吟味イムヒ後具是詔シヲゾ而モ且
口書シテシテ各オハシ載スル權誅シテサガリ非アリヤ出スル事已
麥シタマ至シタマ利運リユン切カツ研カツ兩事リヨウジ堂ドウサル却
テ激烈リカクシテ久クニ同志チドギノ諸友シラフ布惜ハシケルハレ
吾ト五死ゴシ布惜ハシケルニナルニ非アリ聲ボイス又復是シテ
思シテヘ成シテ一死區イシキ一言イチモン得失ドエフニ非アリ今
日ヒテ恭ハヂメ好權シテサガリ為シテニ死シテス天地神明チタケンメイ想
鑑シテ上アリ何惜ハシケルカラン

一吾崎回初シテ素シテヨリ王シテ謙シテラス又死シテ四シテ

唯誠シテ通シテ寧シテ以シテ天命シテ自譽シテ委シテ化シテナリ
廿月九日シテ至シテ辛シテ亥シテ略シテ死シテ期シテ故シテ其詩云
無盡シテ唯當シテ日市シテ賊シテ倉公シテ寧復シテ望生恩シテ又後
廿月五日シテ十月五音シテ吟味シテ寛容シテ在シテ歡シテレ
又シテ辛シテ亥シテ期シテ大シテ頗シテ慶幸シテノシテシテ此シテ五音身
ラ惜シテ云シテめシテ登シテニ非アリ柳シテ故シテアリ去シテ禪シテ大シテ晦
朝談シテ已シテ幕府シテ實シテ今春シテ三月五日シテ吾公シテ駕
己シテ軟シテ袴シテ發シテ是シテ葉是シテ花シテ及シテ栗シテ之シテ并シテ
求完シテ極シテ急シテ六月シテ未シテ足シテ未シテ及シテ及シテ
秉人シテ情無シテ見聞シテ七月九日シテ獄シテ來シテリ天下シテ
形勢シテ大シテ察シテ神國シテノ車シテ猶シテ大シテキモシテアリ
悟シテ柳シテ生シテ幸シテスルシテ念シテ勤シテ大シテ吾シテ若

死ヌニハ勤タルモノハメ泊波セルナリ
猶モ十六日ハ春三奉行權詔書ヲ施
措スルヲ知リテヨリ更ニ生ヲ幸人シ

景弟平生學問ノ得力然ルナリ

一今日死ツ決スルノ安心ハ四時ノ順環ニ北得レ
可リ蓋被木稼ヲ見ニ春種レ夏苗シ秋
茹火藏ス秋冬ニ至ニハ人皆具歲功ノ成ル
悦ニ酒ヲ造ト醴ヲカリ村野歡声アリホ
ソ曾テ西成ニ臨テ歲功終レテ衰ミタ
聞カシ吾行年三十一年成ルトナゾ死メ
禾稼ノまゝ秀テズ實ラカルニ似シ惜バ
ヘキニ似タリ無解義卿ノ身ヲ笑ムヘハ

星亦赤寅ノ時ナリ何ソ必モ亥シ何トナレハ
人壽ノ定ナシ木稼ノ癸ニ四時ノ經レ加キ乘大
十歲ニシテ死充者ハ十歲中自ラ四時アリ
二十八自ラ二十ノ四時アリ三十九自ラ三十ノ
四時五十百ハ自ラ五十百ノ四時アリ十歲
ヲ以テ經トスル蝶蛇ヲシテ靈椿シモト欲
スルナリ百歲ヲ以テ長シトスルハ靈椿シメ蝶
蛇矣シシト欲スナリ荷シク金達セストス
義卿二十四時已備ホ秀亦寔其批毛ト其
粟毛ト吾ガ知所ニ非ス若シ同志ニ士文
徵良ヲ情ニ縕紹ノ人アラハ乃ク後未
種ナキシ絶ヘズ自ラ禾稼ノ有年ニ取
ルナリ同ニ大昌ラ考思セヨ

一 東口場屋ニ居ル水ノ郷士堀江克之郎余
ホタ一面にて萬事真知セリ真益多
余謂曰昔シ矢部殿而ハ殊名疾ノ御願
ケノ日ヨリ絶食テ歎懐ヲ詔テ死卓果シテ
歎懐ヲ良ケタリ今且下モ自ラ一丸ヲ期ル
カラハ祇念ノ篤テ内外ノ數ヲ掛ヘレヨ
心ラ残置テ結レヨトテ寧ニ告戒セリ
吾誠ニ此言ニ感服ス又帖次伊太夫ハ水
藩ノ言ノ堀江ト同居ス金ニ告テ曰今旱
ノ御沙汰モ多々聞テレバ少子ハ海外ニ赴ケ
天下ノ事極テ天命ニ付セシム但一矢
並下丸ヘキ事ハ同志拵シ後輩残シ

度ナリト此言大ニ吾志ヲ得タリ吾
枕念ラ竈ル所ハ同志ノ壬申變ニシガ吾
志ヲ絶紹テ尊攘ノ大功ヲ建テシ
オ吾死在堀江^事本所亀沢町ニ山口三輪上
毛獄中ニ在モ同志ミテ者頗ル交テ
結ベシ又本所亀沢町ニ山口三輪上
毛者アリ義ヲ好ムト見ニ堀江^事
車ト外向ニ在テ大ニ周旋セリ尤モ
及フヘキラセルホク一面モナキ小禁
ノ事ニモヨリ中止ルハ小林ノ為ニモ亦
大ニ周旋セリ此人想ニスルナシ一旦
三子ヘ、通路ハ此三輪老ニ北スヘシ

一

堺江常ニ神通ヲ宗ツ天皇ヲ尊ヒ大セリ天下
下ニ明白ニシ異端邪說コ朴セシ不欲大謂リ

天朝コリ教召ラ相校ヒテ天下蒙元充加矣
ト金謂ラ教召ラ相校ハニ一策ナルカヨモ京師ニ

禁太宰校興シ天朝御學風ア天下ミホシ又天下ノ

奇村良祐ヲ京師貢レ然後天下吉キノ正論確立

聖集ノ書ヨシ天朝御教習、餘ヲ天下ニ分守ハキノ

人ハ自之定スヘシト國ヲ平生子處、嘗談ヒ所ノ事

據堂議ト合セ堺江謀リ是ラ子也仕凡フ學子
子處若ヒ能リ同毛ト謀リ内外志ラ協ヘ掌ミシメ
をシ端堵アシド吾ノ志ト尤所モア荒ゼミム
スシ幸勤詮繡古考ノ事一跋スト重ニ傳皇振
秀荀已久キニ非シ之善術シ設ア前繕ラ經綱

セミシルヘカ文京御學校輪方奇モヤ

一

一
林氏其志師、崇禎院定ヨリテ百姓町ヘ至多
志席曲以フ聽聞モナラ許サル講日ニハ公側方先生
テ攝師管教家清家及ニ地下ノ儒者相混スルナリ
學ヲ以基其國ヲ更ニ斟酌ラ加ヘ、幾等モ妙策
尼ヘシニ懷德堂ニハ曾元上皇寢革動顛ア
リ林、齋司家ノ諧大ニテ咲夏連里ノ齋科ニ
歎タル京師諸人中異言極テ至シ其人多材
多藝惟文官深莫名譽事ノオイ人ト見工
西奥州屋ヲ余ト同居ス後東ロニ物ル京師チ
高、鎌鹿石而間筑別テ知已ノ由山古義

秀林ノ為ニ太ニ周旋シテ、鎌原山口カノ
キツテ海外ヲモ吾國ヲノ士通信ヲスレ
京師ノ事記アハ後未松木ノ力ヲ得シ所アシ
一謹ノ高柳藩士長翁、宗右衛門、年未考
ヲ諫ノ宗藩水家、親睦ノ事は、若ニ世人
十、東奥羽屋アリ其子遠水、余ト西奥同居
以父之罪科何如事ノ如くヘカラス同志ノ諸文
也ニ記念セヨ子母ナ長ひ川翁ヲ一見シ、獄
吏若林之、法隻語ヲ交ルイヨ、得又翁
猶語スルチ、加ソ曰寧為玉碎勿勿為屋
ト吾甚ク其意感ス同志其ニシテ嘆等
一念猶金彼ニ召スニ非ス天下ノ草ヲ成スハ天下
有志ナ士ト志ト通スルニ非レハ得ス而シ敷
命以回新ニ得シ所ノ人ナルヲ學テ同志
告示スナリ又勝野保三郎軍已ニ出掌不報
其詳ヲ問知スベシ勝野、父豐作今潜伏不
免ニ有志シマト御入り他日事平ヲ待テ抑
色スベシ今日、事同志、諸志敢リ餘儀残
ノ同士ヲ問訊尤如ソベシ一致の挫折アレ
宣勇士ノ事ヲラシヤ功ニ嚼スノ

歎前ノ橋本左内ニ大敵ノ誅せニル庚午
廿日ナリ左内東奥至ル五、六日ノミ勝保同
居セテ後勝保、西奥ニ来リ、争同居ス、勝保、同
居ヲ聞テ益々左内ト争争テ、嘆天左内、西奥
御居中資治通鑑ヲ読ミ註、作、漢紀終

又獄中教學工作等、事論セシ由勝保方
爲ニ星ヲ語、獄ノ論大ニ吾意ヲ得ナリ、不
益ニ左内ヲ教ノ一談ヲ發セシフヲ思不喫
清狂ノ護國論スニ吟稿口羽ノ詩稿天下聞ニ
全寄示シテ故ニ余星ヲ水人船江伊美
贈ルヲ許ス同志其吾ニ代テ吟言ヲ譲
幸甚ナリ

答

一 同志諸友ノ内山田村人保久枝子康兄弟
等集勅沃塙江長谷り小林勝野等へ
告知シ置ヌ村塾ノ事湊佐阿月ノ筆
告置ケリ飯田尾寺高杉及ヒ利輔ノ事
諸人ニ告置シナリ是皆吾苟モ星ヲ
スニ非ス

ゆきつけ終くノは

心もよきの種、嘗て風の思ひせども
呼たゞめ、至る所の心の安堵を
すのたゞく、ト
付心こゝをぞれどんと
君と心を交換へよ
勇氣をもてても友にめぐへば
かくかくじよん?
せたゞひゆくえうく夫と有
猿さんナゾうかんをれゆく

十月廿二日



